

分にも大に消長を來したものである。

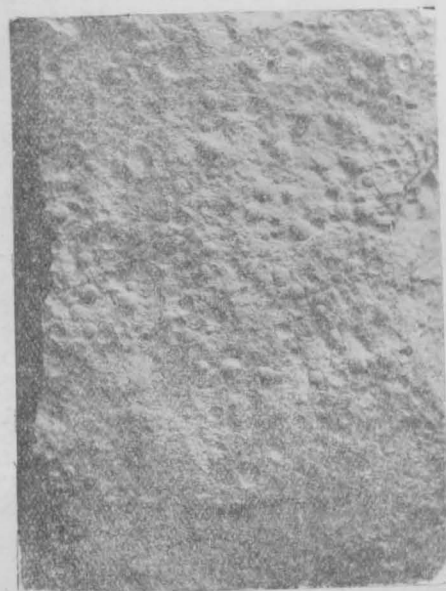
要するに上遠田の玄武岩も、鵜ノ鼻の特殊安山岩も、其由來は同一であつて、現に採掘して

實用に供するは、主に雲母安山岩であるけれども又輝石安山岩と稱するを妥當なりとする部分もあるのは事實である。(結) 昭和四、七、三〇記

石見山間部に於ける豆灰 (Ash-*pisolite*) 園山市太郎

山陰線石見長濱驛に下車し、安山岩質凝灰岩と花崗砂岩とを載いて迸發した霞石玄武岩臺地

の東端から大内村に入り、周布川の河畔から字一ノ瀬を経て山間部に入れば、橄欖岩斑礫岩及



第一圖

石見那賀郡安城村の豆灰

閃綠岩の相連る羊腸たる縣道を辿り長濱驛から正に二〇軒、那賀郡安城村長安本郷に達する。此地は標高約四〇〇米準平原とも稱すべき地形を爲し、低い丘陵の間に不定形の水田や畑地が發達して居る。そして村の中心地點から東へ約一軒の地に於て字栃木方面と河内方面から注ぐ溪流を合せて本郷川を作す部、即ち三隅川の上流小區域に表題岩石の分布を見る。石英粗面岩質凝灰岩で、肉眼

石見山間部に於ける豆灰

的によく識別せられる程度の岩屑の層は約二米の厚さあり、之れが上層の僅に二〇糎許は頗る緻密で淡青灰色を爲し、豆灰の粒子は略層理に

平行して存する。

走向は正しく南北

に走り、東へ約三

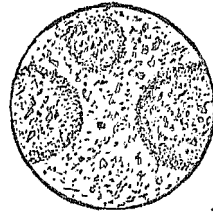
〇度の傾斜を測ら

れる。上方には之

れに整合して緻密

質帯褐色の頁岩が厚さ約一〇米ある。豆灰層の

下盤を爲すのも亦頁岩であるが、其一部を觀察



x5

臺灣之農業 (二)

神保六合男

五、農業人口

昭和二年現在で、自作者七十一萬五千五百五人、同戸數十一萬六千八百九十五戸(全農業者戸數

し得られるのみで、他は河畔が耕地であるが爲め未知數たるは已むを得ぬ。思ふに濱田の南約二軒の地にある三階山を盟主とし、南へ本村にも群立する石英粗面岩の山彙があるから、之れに伴ふ凝灰岩で、所謂山間部第三紀層の一つに數ふべく、第三紀瑞穂統の前期に相當する沈降期の堆積物である。鏡下に於て觀察すれば、粒子の構造と周圍との關係もよく分り、降灰中驟雨あり多少の灰を混じた雨滴が、堆積した灰の上を輾轉した當時の地文學的現象を偲ばしめる好資料である。(結) 昭和三、七、二五記

の二九%) 小作者九十四萬四百五十三人、同戸數十五萬九千九百七十七戸(同四〇%)、自作兼小作者七十四萬六千二百五十八人、同戸數十二